

桐に恋して18年

「自然破壊を悔いて桐の木の植林へ」

私が、桐にたどり着くまでの経緯をお話致します。
20代の頃は外国航路の貨物船航海士として地球を三周五〇か国廻っていました。二十世紀後半、コンピュータの進歩で航海士としての技術が要らなくなり、思い切ってアフリカのジャングルでの原木仕入の仕事に転向しました。

五年が過ぎたある日、モアビやブビンガなど直径一メートルを超える原木買付のため、セスナに乗って奥地に向かう途中、眼下に木はありませんでした。パイロットに進路の苦情を申し立てたところ、『お前が五年間で全部買って行ったじゃないか』と言われ、これほどの大規模な自然破壊に手を貸していたのかという懺悔の気持ちに包まれていた時、アメリカ東岸でのポプラ平行合板工場立ち上げの仕事が廻ってきました。

当時大人気だったオーク材を伐採した跡地には、ムク材では曲がりが多いポプラの木が繁茂していました。伐採量より生える量が多いこの木を原材料とし、製造過程でおが粉を出さない合板は、製材品製造に比べ原木の歩留りが著しく改善し、自然破壊の大幅緩和にも繋がると教えられ、タイプII平行合板の製造販売に従事するようになりました。

しかし数年後、今度は合板の接着剤によるシックハウス症候群が問題となり、自然破壊どころか子供たちの健康被害の加害者になってしまいました。自然破壊の無い促成木で健康増進に貢献できる木はないか。こうして辿り着いたのが桐の木でした。たまたま仕事で中国に行ったとき、サラリーマンの貯金でも見渡す限りの土地を借りられる事を知り、桐の植林をまず中国で開始しました。

そして、建材用途ならば十分使用できる桐の成木が中国では十年余で育つ事がわかり、自社で使用する桐の木の植林を無農薬、無化学肥料、無除草剤で実施してきました。二〇〇七年、アトピー性皮膚炎、化学物質過敏症を治療するドクターの新たな癌治療室を当社の『アク抜き桐』で施工しました。その

際、『樹種は桐、植林は無農薬、製法はアク抜き、』の三点セットで患者さんが過ごしやすい癒しの空間施工を試みたのが、医療とのタイアップのきっかけとなりました。

船乗り時代、貨物船にはドクターが乗船していないため、洋上での外科手術は航海士の私の仕事でした。前職が医療と桐を結ぶ架け橋となってくれたのです。それまで、木、材木は家や家具を作る素材だと思っていました。しかし、桐の場合、おばあちゃんに笑顔が戻ったり、患者さんに笑顔が戻ったり、真冬に家に帰ると、暖房もかけていないのに家の中がほっかりしていたり、熱帯夜暑くて身の置き所がないときは、桐床に寝転ぶと気持ちよく眠れたり、アク抜きした桐は建築素材でありながら、健康素材として感動を与えてくれました。

こうして弊社は自社で桐の植林を行い、自社の『アク抜き桐』で桐建材、家庭用桐製品の製造販売を行う会社として歩き始めました。適材適所で桐をお使いいただくため、桐新商品の開発にも勤しんでおります。

(株)グリーンフラッシュユ.

代表取締役 八木 隆一